様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月　５ 日現在

機関番号：３２６０７
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2021
課題番号：１７Ｋ０４４５１

研究課題名（和文）発達障害児を持つ養育者への情緒応答性の評価を媒介とした子育て支援に関する研究

研究課題名（英文）A Study on Parental Support Method for Parents Rearing Children with Developmental Disorders through Evaluation of Emotional Availability

研究代表者
生地　新（Oiji, Arata）

北里大学・医療系研究科・教授

研究者番号：２０１８５１７７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では、情緒応答性尺度（EA）が自閉スペクトラム症（ASD）児の母親への支援のツールとして有用性があるかを検討した。対象は、7人のASD児とその母親であり、対照群は15人の定型発達の乳幼児とその母親であった。両群においてEAを施行した。EA評価の後に、EAのフィードバックを行った。対照群にだけ、二度目のEAの評価を行った。
　対象におけるEAの結果の分布は対照群の分布と類似していた。対照群のうち10組は、2回目のEAの得点が１回目より高く、５組は２回目の得点が１回目より低かった。この結果、EAがASD児の母親への支援のツールとして有用である可能性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、大人と子どもの間の情緒交流について簡便に客観的に評価できる情緒応答性尺度（EA）を発達障害の子どもの支援のツールとして使うための予備段階の探索的研究である。本研究を通じて、EAが、発達障害を持つ子どもの母親や家族への支援に有用である可能性が示唆された。親子関係の客観的な評価の尺度として確立された方法はまだ少なく、本研究を通じて、様々な問題を抱えた親子への支援のツールとして情緒応答性尺度への関心が高まることが期待される。
実際にEAを、発達障害を持つ子どもの親や家族への支援のツールとして有用であることを示すためには、調査対象の人数をさらに増やして、統計学的な検討も行う必要がある。

研究成果の概要（英文）：　In this study, we examined the usefulness of the Emotional Availability Scales 4th edition (EA) (Biringen Z et al., 2008) for supporting mothers of children with autism spectrum disorder (ASD).
　The subjects were seven children with ASD and their mothers. The control group were fifteen neurotypical infants and their mothers. We conducted EA in the subjects and the control group. EA Feedback session and Interview about the feedback was conducted with the mothers after the EA assessment. The second EA assessment was conducted only in the control group after two months of the first assessment. The distribution of EA results in the subjects was similar to that of neurotypical control group. Ten dyads of the control group showed higher score in the second EA assessment than in the first assessment. Five of them showed lower score in the second EA assessment than in the first assessment. These results suggested that EA may be useful tool for supporting mothers of children with ASD.

研究分野：児童青年精神医学、精神分析学、臨床心理学

キーワード：情緒応答性　発達障害　自閉スペクトラム症　親子関係　子育て支援

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

(1) 情緒応答性尺度について

養育者と子どもの情緒的関係性の評価方法として、Emotional Availability Scales 第４版（情緒応答性尺度：以下 EA と略す）（文献①）がある。情緒応答性 emotional availability（文献②）は、Emde R が提唱した概念で、養育者（大人）と子どもの間の肯定的でダイナミックな交流のあり方を意味する。養育者と子どもが心地よく楽しい時間を過ごすときに、情緒応答性が働いていると考えられる。Biringen Z らは、（文献①）は、ビデオ観察で大人と子どもの間の情緒応答性を測定する尺度として、EA を開発した。EA においては、大人と子どもが自宅などの自然な環境で一緒に遊ぶ様子をビデオ・レコーダーで記録し、大人の側と子どもの側の情緒応答性を、大人の側の「感受性」「構造化」「侵入性」「敵意」と子どもの側の「反応性」「関わり合い」の計６次元で評価する。特別の観察室を必要とせず、評価するための訓練も最短で３日間で修了する。子どもが発達障害の場合でも評価が可能である。なお、研究開始前に、研究代表者は、EA の基本コースの認定を受けていた。

（2）情緒応答性尺度の臨床現場での応用の可能性について

研究代表者らは、発達障害児とその親への心理的支援や 児童福祉施設に措置された子どもたちと施設職員への心理的支援を行ってきた。その中で、親子関係や施設職員と子どもの関係を直接観察し、その問題点と好ましい点を評価するツールを探していた。そして、EA という方法が、自然な環境下におけるビデオ記録に基づいた関係性の評価方法であり、比較的、簡便な方法であるため、臨床的な介入に使いやすい方法という印象を持った。そこで、研究代表者らは、母親の抑うつと情緒応答性に関する研究を予備的に進めていた。そのような研究を通じて、「EA により養育者と子どもの間の情緒応答性を評価し、その後、EA 評価用のビデオ記録を養育者と一緒に見ながらその評価結果を伝えて話しあう」という介入によって養育者の情緒応答性を高める可能性があると考えた。

本研究は、EA が発達障害を持つ子どもとその養育者の関係性の修復や改善のためのツールとして使える可能性を明らかにするために構想された。

２．研究の目的

(1) 本研究は、自閉スペクトラム症を持つ子どもとその主たる養育者を対象とした。発達障害を持たない子どもとその主たる養育者を対照群とした。本研究では、まず、自閉スペクトラム症を持つ子どもやその養育者の EA の評価（情緒応答性）について対照群の EA の評価と比較検討することを第一の目的とした。

(2) EA の評価を養育者と共有することが養育者と子どもの間の情緒応答性の向上に役立つ可能性について質的に示すことを第二の目的とした。

3. 研究の方法

(1) 自閉スペクトラムを持つ子ども（幼児期から学童期）とその養育者を対象とした。対象群における検査の手順は以下の通りである。EA の評価のための動画は、養育者に対して「子ども

を楽しませてください」と教示して、20 分間その子どもと過ごしてもらい、その様子をビデオカメラで録画したものを用いた。記録する場所は、自宅のリビングルームか医療機関もしくは心理相談機関のプレイルームのいずれかであった。その上で、EA のシステムを用いて、複数の研究者により情緒応答性の評価を行った。そして、2 週間後にビデオを見ながらその評価結果を伝えた。評価を聞いた後、養育者が何を感じたかを聴取し、その後、研究者が養育者に EA に基づいて子育てに関する助言等を行った。そして、今回の介入がどのように役立ったかについて面接で聴取した。面接の結果は、質的な方法で評価した。

(2) 対照群として、定型発達の子どもとその養育者（母親）を設定した。本来、対象と比較検討するために、対象と同じ年代（幼児期から学童期）の子どもを確保したかったが、新型コロナウイルスの流行の影響もあって、その年代の対照群を確保することが難しかった。このため、厳密な意味の対照群ではないが、定型発達の乳児とその養育者（母親）に対して検査や面接を行った。対象群における検査の手順は以下の通りである。EA の評価のための動画は、養育者に対して「子どもを楽しませてください」と教示して、20 分間その子どもと過ごしてもらい、その様子をビデオカメラで録画したものを用いた。記録する場所は、自宅のリビングルームか医療機関もしくは心理相談機関のプレイルームのいずれかであった。その上で、EA のシステムを用いて、複数の研究者により情緒応答性の評価を行った。その 2 週間後にビデオを見ながらその評価結果を伝えた。評価を聞いた後、養育者が何を感じたかを聴取し、その後、研究者が養育者に EA に基づいて子育てに関する助言等を行った。そして、さらに 2 ヶ月後に EA をもう一度評価し、今回の介入がどのように役立ったかについて面接で聴取した。面接の結果は、質的な方法で評価した。

(3) 情緒応答性尺度 EA は、Colorado 大学 Denver 校で Emde の指導の下で研究していた Zeynep Biringen らが中心となって開発した大人と子どもの情緒応答性の評価法である。日常的な場面で大人と子どもが遊んだり話をしたりして過ごしている様子を２０分程度ビデオで録画し、その様子を観察して大人と子ども両者の情緒応答性を評価するものである。大人と子どもの関係を肯定的な側面を中心に評価できるところが特徴である。しかし、ネグレクトや虐待のリスクの評価にも役立つ。0 歳児から思春期までの幅広い年齢層に適用できる。また、親子関係だけでなく、保育士や教師、施設職員と子どもの関係の評価に適用できるものである。実験室は必ずしも必要ない。

情緒応答性尺度においては、表 1 で示したように、大人の側の情緒応答性は４つの次元、子どもの側の情緒応答性は２つの次元で評価される。大人の側の評価の次元は、「感受性」「構造化」「侵入的でないこと」「敵意がないこと」の４つであり、それぞれの次元が７つの評価項目から構成されている。子どもの側の評価の次元は、「大人への反応性」「大人への関わり合い」の２つであり、それぞれの次元が７つの評価項目から構成されている。それぞれの親子の情緒応答性の総合的で臨床的な評価として、Clinical Screener があり、これは 10 点から 100 点で評価される。本研究では、主として Clinical Screener の評価得点を用いた。

表１．情緒応答性尺度の尺度構成

大人についての尺度
- 大人における感受性（７項目）
- 大人の構造化（７項目）
- 大人が侵入的でないこと（７項目）
- 大人に敵意がないこと（７項目）

子どもについての尺度
- 子どもの大人への反応性（７項目）
- 子どもの大人への関わり（７項目）

表2. 情緒応答性尺度の臨床スクリーニング尺度

91-100：相互に情緒的応答性が高い
81- 90：ほどよい情緒応答性

71- 80：複雑な情緒応答性
（大人と子ども間のEAレベルに差がある）
61- 70：複雑な情緒応答性（みせかけの良い関係）

41- 60：無関心さが見られる領域
11- 40：明らかに問題のある領域

4. 研究成果

(1) 対象群における情緒応答性評価の結果

表３は、自閉スペクトラム症を持つ子どもと親のペア、7 組の情緒応答性の評価の一覧である。臨床スクリーナーによる総合評価の得点順に並べている。最高得点が 94 点で、最低が 68 点であり、90 点以上と高く評価されたのが 3 組、80 点台で程よいと評価されたのが 1 組であった。総合評価の得点が 79 点以下で、複雑な情応答性と評価されたケースが 3 組であるが、そのうち、70 点台の 2 組は子どもの側の自閉スペクトラム症としての障害が重く、そのために「大人と子どもの間の情緒応答性レベルに差がある」という評価になった。母親の側の情緒応答性は、この 2 組も高かった。総合評価の得点が 60 点台のケース 7 の母親は、子どもの障害を受容することが少し難しく、子育てにストレスを感じやすく、焦りがあると考えられた。このケースには、継続的な子育てや自閉スペクトラム症を持つ子どもへの対応に関する親相談を継続する必要があると判断された。このケースを除くと、親とこの情緒応答性において、大きな問題はみられず、現在受けている教育や療育および医療に加えて、新たな支援は必要ないと考えられた。

表3. 情緒応答性評価の結果

ケース番号	子どもの年齢	子どもの性別	総合評価	感受性	構造化	侵入的でない	敵意がない	親への反応性	親への関わり合い
1	10	男子	94	7	7	6	7	7	6.5
2	8	男子	94	7	7	7	7	6	6
3	4	男子	92	7	7	6	7	7	6
4	9	男子	85	7	6	7	7	5.5	5.5
5	6	男子	75	6	6	6	7	5	3
6	8	女子	75	6	6	6	7	5.5	5.5
7	9	男子	68	4	5	4	5	5	5

（2）対照群の親面接の内容

① ケース２の母親の面接内容

ケース２は、Clinical Screener で「相互に情緒応答性が高い」と評価されたケースである。

パニックになった時の対応がつらかった。それと、下の妹との間で手のかけ方のバランスを取るのが大変だった。地方にいた時に周囲の人の理解が得られにくかったが、都会に出てきて理解してもらえていると思う。夫がとてもよく理解しサポートしてくれている。自分の子どもが本当に可愛いのだということを実感した。自分の親は優しく育ててくれたが、親のありがたみもわかるようになった。動画を見ていて、自分は少し動くのが早すぎるように感じた。自分が保育関係の仕事をしている影響もあるかもしれない。自分の経験を多くの人に知ってもらいたいと思う。

② ケース４の母親の面接内容

ケース４は、Clinical Screener で「ほどよい情緒応答性」と評価されたケースである。

１歳半頃で診断がついてない頃は、目も合わせないし、この子がどういう気持ちなのか分からないのがつらかった。今は、こちらの目を見てくれるし、こちらの言葉もある程度わかるようになってから楽になったと思う。小さい成長でも嬉しいと感じるようになっている。家族、特に夫はよく理解してくれて、サポートしてくれている。この子の成長を喜んでくれる。自分の親は穏やかで優しく育ててくれた。動画を見ていて、自分の関わりを見ると恥ずかしい。こんな関わりでいいのかなと思う。

(3) 対照群における情緒応答性評価の結果

1 回目の EA 評価において、Clinical Screener の得点が 91 点以上の EA 高得点群は 11 組，61 点以上 90 点までの EA 中得点群は 5 組であった。

(4) 対照群における情緒応答性評価の変化

1 回目と 2 回目（評価結果のフィードバックの 2 ヶ月後）の EA の Clinical Screener の得点を比較した時に得点が上昇したのは 10 組であり、低下したのは 6 組であった。得点が上昇した 10 組では、全体的に介入の満足度が高かった。次元の評価では、母親の感受性や構造化，子どもの反応性等多くの次元で得点が上昇していた。得点が減少した 6 組では、介入の満足度は上昇した 10 組よりは低かった。次元の評価では、母親の感受性や，子どもの反応性，子どもの母親への関わり合いの低下がみられた。

(5) 以上の結果から、自閉スペクトラム症の子どもとその母親の間の情緒応答性の評価は、一般の定型発達の乳児とその母親の間の情緒応答性の評価を大きな差が無いことが示唆された。そして、情緒応答性を評価することで、その母親や家族への支援の必要性の評価にも役立つ可能性が示された。また、定型発達の乳児を持つ母親に対しては、情緒応答性の評価を養育者に伝えて子どもへの関わり方を助言することで情緒応答性が向上するケースが多いことが示唆された。

＜引用文献＞

① Biringen, Z. (2008). Emotional Availability (EA)® Scales Manual, 4th Edition, Infancy/Early Childhood Version (child age: 0-5 years). Boulder, CO, emotional availability.com.

② Emde, R.N. (1980). Emotional Availability: A reciprocal reward system for infants and parents with implications for prevention of psychosocial disorders. In Taylor, P.M. (Ed.) Parent-infant relationship, Orlando, FL, Grune & Stratton, 87-115.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 植木聖衣、生地　新	４．巻 8
２．論文標題 発達障害児を育てている母親におけるBefefit Findingの研究	５．発行年 2020年
３．雑誌名 北里大学臨床心理相談センター紀要	６．最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 生地　新	４．巻 29(1)
２．論文標題 情緒応答性評価に基づく親子関係へのアプローチ－発達障害児を持つ母親への支援にかかわる試み－	５．発行年 2020年
３．雑誌名 乳幼児医学・心理学研究	６．最初と最後の頁 15-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Masako Miura, Fumi Adachi, Arata Oiji	４．巻 21(1)
２．論文標題 Impact of mother's parental bonding experience on emotional availability (EA) with their children	５．発行年 2021年
３．雑誌名 子どもの健康科学	６．最初と最後の頁 69-81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　2件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 生地　新
２．発表標題 情緒応答性評価に基づく親子関係へのアプローチ
３．学会等名 日本乳幼児医学心理学会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 生地　新
２．発表標題 発達障害児を持つ養育者への 情緒応答性の評価を媒介とした 子育て支援に関する研究
３．学会等名 第1回情緒応答性研究会（大正大学）（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Arata Oiji, Fumi Adachi, Masako Miura, Shuhei Kaneko, Satoe Ueki, Yurika Tsuji, Yukiko Morioka
２．発表標題 Usefulness of the emotional availability scales for supporting mothers of children with autism spectrum disorder
３．学会等名 17th World Congress of World Association for Infanct Mental Health
４．発表年 2021年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	沢　哲司 (Sawa Tetsuji) (80756768)	北里大学・医療系研究科・講師 (32607)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関